

埼玉学園大学・川口短期大学 機関リポジトリ

グローバル社会における海外在住国際結婚家族のアイデンティティ形成と「居場所」：
ありのままの自分を求めて

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-03-11 キーワード (Ja): キーワード (En): “Ibasho” , “cultural” Identity, interculturally-married Japanese women, Japanese-Indonesian young adults (Hafu / Double) 作成者: 鈴木, 一代 メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/1170

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



グローバル社会における海外在住国際結婚家族の アイデンティティ形成と「居場所」

— ありのままの自分を求めて —

Cultural Identity Formation and “Ibasho” of Overseas Japanese-Indonesian Families in Multicultural Environments

Looking for One's Own Self

鈴木 一代

SUZUKI, Kazuyo

This study aimed at discussing the cultural identity formation of Japanese immigrant families as well as the relationship between “Ibasho” (one’s place where one feels secure, comfortable and accepted) and cultural identity of the families. The participants were 22 Japanese women married to Indonesian men and 10 of their children (Japanese-Indonesian young adults) living in Indonesia. The Cultural Anthropological - Clinical Psychological Approach [CCA/CACPA] (Suzuki, 2002, 2008; Suzuki & Fujiwara, 1992) was employed between 1991 and 2017. We carried out repeated interviews mainly and used the qualitative analysis. Results showed that Japanese immigrant women became to have two cultural viewpoints in time, namely those of native and host cultures, however, maintained Japanese culture as the basis of their cultural identity throughout their lives. On the other hand, their children acquired more or less both Japanese and host (Indonesian) cultures and formed bicultural identity (“identity as intercultural children with Japanese ancestry”). It was suggested that “Ibasho” played an important role for cultural identity formation.

<問題>

グローバル化という言葉が使われるようになってから久しいが、グローバル社会のなかで、人々はどのようなアイデンティティを形成していくのだろうか。そして、ありのままの自分の「居場所」をどのように見つけていくのだろうか。また、アイデンティティと

「居場所」はどのような関係にあるのだろうか。

マイノリティ（移民、外国人勤務者・労働者、国際結婚者などやその子どもたち）が、ホスト社会の現実の生活のなかで「ありのままの自分」でいられることは極めて重要である。「居場所（Ibasho）」は、日本固有の概念であり、他の言語には翻訳しにくい¹⁾、ま

キーワード：「居場所」、(文化的)アイデンティティ、国際結婚日本人女性、日本-インドネシア国際児青年(ハーフ)
Key words : “Ibasho”, “cultural” Identity, interculturally-married Japanese women, Japanese-Indonesian young adults (Hafu / Double)

た明確な定義が存在するわけではないが、「ありのままの自分」と深い関係があると推察される。また、アイデンティティは、「複数の『〇〇としての自分』を統合する根源的な自分であるが（Erikson, 1950）、多文化環境のなかで、人々は複数の「居場所」を確保することによって、「ありのままの自分」を維持していくことができるようになると考えられる。

1. 「居場所」と（文化的）アイデンティティ

（1）「居場所」

「居場所」は、「いるところ、いどころ」（広辞苑）であり、「居る場所」（空間的・物理的な意味）を示すが、学校以外の行き場である「東京シューレ」²⁾（1985年）をきっかけに心理的な意味で用いられるようになった（石本, 2009）。つまり、「居場所」は「空間的・物理的・実地的な居場所」と「心理的・精神的な居場所」の両方を含んでいたが、その後、むしろ心理的な意味合いをもつ言葉として用いられるようになった。また、すでに述べたように、「居場所」の概念については共通理解があるわけではなく、明確な定義は存在しない。たとえば、「心の居場所」（一般的な意味）、「安定感や安心感を実感できる場所」（額賀, 2014）、「自分らしく生き生きとしていられる場所」（鈴木, 2009）、「安心で、居心地がよく、受け入れられていると感じられる場所」（Suzuki, 2018）などがある。

ところで、鈴木（2016）は、「居場所」を研究する際には、①「空間的・物理的居場所」（実際にその人がいる場所、たとえば、生活の基盤〔経済的など〕、仕事、家、学校）と②「心理的・精神的居場所」（精神的に落ち着ける場所/周囲から受け入れられていると

感じられる場所など）を分けて考えることが有用なことを指摘している。①「空間的・物理的居場所」と②「心理的・精神的居場所」は必ずしも一致しないこともあるし、漠然と「居場所がない」場合でも、どちらか一方の「居場所」は存在することもある。たとえば、「空間的・物理的居場所」として「家」はあるが、そこは「心理的・精神的居場所」でない場合や、「空間的・物理的居場所」はないが（例：一時的災害避難者）、「心理的・精神的な居場所」として「家族」がいる場合もあるし、両者共に存在しない場合もある（例：単身の難民）。つまり、「居場所」というと「こころの居場所」と理解されることが多いが、心理的居場所としての「居場所」のみを問題にするのでは不十分であり、物理的・空間的場所である「実際の居場所」も考慮し、①と②の両方の側面から検討する必要性がある。 「居場所づくり」という言葉が示すように、「居場所」としての実際の場所（空間）は大切である。特に、マイノリティの心理的・教育的支援を目指し、「居場所づくり」を問題にする場合には、少なくともどちらか一方の「居場所」を確保できるように支援することが重要になる。「実際の居場所」（物理的・空間的居場所）と「こころの居場所」（心理的・精神的居場所）が同一ならば、真の意味で、ありのままの自分でいられる「居場所」になる。「居場所づくり」では、このような「真の居場所」をつくること、あるいは、それを目指すことに意義があろう。

（2）（文化的）アイデンティティ

マイノリティにとって、アイデンティティ、特に文化的アイデンティティは極めて重要な問題である（鈴木, 2008など）。

エリクソン (Erikson, 1959) は、自我アイデンティティ (ego identity) の感覚について、「内的な斉一性 (sameness) と連続性 (continuity) を維持する個人の能力 (心理学的意味での自我) が、他者に映る自己の意味の斉一性と連続性と合致するという確信 (confidence) である」(p.94) と述べている。個人が自身の斉一性と連続性を認識すると同時に、それらが、他者 (例:自分の所属集団) からも認められているという確信が自我アイデンティティであるが、後者は「集団的アイデンティティ」を意味し、自我アイデンティティは「集団的アイデンティティ」との関係によって生き生きとした実感となる。

本稿では、アイデンティティ (自我アイデンティティ) は、個人的アイデンティティ (個人レベルのアイデンティティ) と集団的アイデンティティ (他者・集団との関係に基づくアイデンティティ) から構成され (両者は相互に関連)、文化的アイデンティティは集団的アイデンティティ (社会的アイデンティティ) の一側面であり、「自分がある特定の文化集団のメンバーとある文化を共有している」という感覚・意識 (文化的帰属感・意識) (鈴木, 2011) であるとする。文化的帰属感・意識は、それを他者からも認められているという確信によって生き生きとした実感となり、自我アイデンティティの形成に重要な役割を果たす。

2. 多文化環境と「居場所」をめぐる主な研究

日本において、複数の文化的背景をもつ人々の数が増加し始めたのが近年の現象であることや、「居場所 (Ibasho)」が日本固有の概念であることから、多文化 (複数文化) 背景をもつ人々の「居場所」についての研究は

まだ始まったばかりであり、研究の蓄積は極めて不十分である。

鈴木 (2009, 2012) は、海外在住の国際結婚日本人女性を対象にした異文化適応についての研究のなかで、①日本からほかの国に文化間移動したことへの肯定的な評価 (精神的な安定、満足感、幸福感など) には、新しい居住国のなかに「居場所」があるという感覚・意識がかかっていること、②「居場所」には、「实际的な居場所」と「精神的な居場所」の2側面があり、肯定的な評価には、「实际的な居場所」と「精神的な居場所」の両方か、少なくともどちらか一方の存在が必要であること、③「实际的な居場所」と「精神的な居場所」は必ずしも一致しないことに言及している。

異文化間教育第40号 (2014年) では、『越境する若者と複数の「居場所」』という特集が組まれている。額賀 (2014) は、多文化背景をもつ子どもや若者 (海外帰国生、日本在住外国人、国際児など) の「居場所」はひとつではなく複数存在するが、それらが統合されていることが重要であることを指摘している。つまり、多文化背景をもつ人々は、国境を越えて複数の多様な「居場所」を持つことが可能であり、複数の居場所の存在によって、こころの安定や居心地のよさを感じることができる。日系ブラジル人を対象にした山ノ内 (2014) や留学生についての村田・古川 (2014) は、通信技術の発達による電子メディア (Facebook, Line, WhatsAppなど) が「居場所」や「居場所づくり」に大きな影響を及ぼしており、「想像上の居場所」(ヴァーチャルな「居場所」) の形成に重要な役割を果たし、遠く離れた複数の国に「居場所」をつくることを容易にしていることを明らかに

している。徳永（2014）も、アジア系アメリカ人の調査から、「居場所」は現実に居住する場所（目に見える物理的空間）だけではなく、国境を越えたほかの国（非居住国）にもあり、さらに想像の世界として存在することに言及している。また、三浦（2014）は、ニューカマー1.5世の「居場所」、マーフィ重松（2014）は、ミックスルーツの人々の「居場所」を取りあげている。

鈴木（2016, 2017b）は、ドイツ生まれドイツ在住で日本人の母親とドイツ人の父親をもつ日独国際児女性（青年後期から成人初期）を対象に、「居場所」とアイデンティティ、さらに精神的健康との関係について検討している。日独国際児女性は程度の差はあるが、バイカルチュラルな文化的アイデンティティをもち、二つの文化が同程度のバランスで存在する「均衡バイカルチュラル・アイデンティティ」³⁾の日独国際児は、「実際の居場所」と「精神的/心理的居場所」の両方を保持しており、精神的健康に関しても良好であること、「実際の居場所」であれ、「精神的/心理的位場所」であれ、複数の「居場所」の存在がより精神的・心理的な安定と心地よさを生み出し、精神的健康を促進することを示唆し、多文化背景をもつ人たちが複数の「居場所」を確保できるようなサポートが必要であることに言及している。また「実際の居場所」と「精神的居場所」の両方か、少なくともどちらか一方があれば、（文化的）アイデンティティ形成に良好な影響を与え、また精神的健康を促進することから、文化的アイデンティティ、「居場所」、および精神的健康の相互関係性を示唆している。

なお、Tokunaga（2018）は、米国のアジア系移民の女子学生を対象にしたフィールド

ワークをもとに「居場所」やアイデンティティ形成について検討している。

本稿では、国際結婚家族⁴⁾に着目する。国際結婚家族はどこに住んでいても、複数文化環境のなかで生活することになる。特に海外出身の親やその子ども（国際児/ハーフ/ダブル）にとって、「居場所」を見つけだすことや、（文化的）アイデンティティ形成は重要な課題である。そこで、本稿では、海外在住の日系国際結婚家族（日本人の母親とその子ども）を例に、長期にわたる縦断的フィールドワークに基づき、「居場所」と（文化的）アイデンティティとの関係について検討する。

<方法>

（1）調査参加者

インドネシア男性と結婚し、インドネシアに移住した中年期の日本人女性22人（40代～60代）、およびその子どもの日本-インドネシア国際児青年10人（20代～30代初頭）。調査開始時においては、日本人女性は20代～40代、国際児青年は乳幼児だった。

（2）調査期間・場所

1991年に開始し現在に至る縦断研究（年に2～3回、各2～6週間）の一部であり、インドネシア・バリ州の都市部が調査地である。

（3）調査方法

「文化人類学的-臨床心理学的アプローチ（Cultural Anthropological-Clinical Psychological Approach [CCA/CACPA]）」（Suzuki, 2002; 鈴木, 2008; 鈴木・藤原, 1992）を用いた。CCA/CACPAの特徴は、縦断的フィールドワーク、ラポールの重視と支援、面接（半構造化・非構造化

面接)と参与観察の反復、マクロとミクロの視点などである。面接調査の際には、研究目的、匿名性の保持、守秘義務などについて十分に説明し、調査についての了解を得た。承諾を得られた場合にはICレコーダを使用した。面接言語は基本的に日本語だが、必要に応じて一部インドネシア語(単語等)も用いた。本稿では、日記(フィールドノート)の「居場所」や文化的アイデンティティに関する部分に着目した⁵⁾。

(4) データの整理・分析

調査参加者(事例)ごとに整理し、主に質的な分析をおこなった。また、各事例から共通項目を抽出し、「共通事例」(鈴木, 2006, 2012)として再構成した。

<結果と考察>

1. 調査地域の特徴

インドネシアの34州の一つがバリ(Bali)州(図1)である。ヒンドゥ教(Bali-Hindu)に根差した文化・伝統を固持しているが、近年、観光開発が進み、多様な文化が混在している。インドネシアのなかでは、比較的経済的に豊かな州であり、他島からの出稼ぎ労働者も多い。また、退職者(年金生活者)などの外国人長期滞在者やインドネシア人と国際



図1 インドネシアとバリ州

結婚をした外国人が多く居住している。大型スーパーマーケット、デパート、ショッピングモール、サークルKなども進出している。近年、インターネット(Wi-Fi)やSNS(Facebook, Line, WhatsAppなど)の普及が著しい。

外務省海外在留邦人数統計(2018)によると、2017年10月現在のバリ州(在デンパサール総領事官管轄地域)の在留邦人数(元日本人やインドネシア国籍のみの日系国際児を含まない)は3,013人、そのうち長期滞在者は790人、永住者は2,223人である。永住者の多くは、インドネシア人と結婚した日本人および日系国際児(二重国籍)と推定される。1991年頃に日本人会が創設され、日本人・日系人コミュニティの中核となっている。日本人会の組織として日本語補習授業校が存在する。個人会員の大部分は日本人国際結婚者とその家族である。インドネシアは、かつて、日本軍によって占領された経験をもつにもかかわらず、日本人や日系人は受容されており、日本語も肯定的に評価されている。総合すると、バリ州は、日本人国際結婚者や日系国際児(日本-インドネシア国際児)にとって住みやすい場所と言える。

2. 国際結婚日本人女性の文化的アイデンティティ形成と「居場所」

(1) 調査参加者(国際結婚日本人女性)の主な特徴

日本で生まれ、インドネシア男性と結婚し、1980年代末から1990年代初めに、20代から30代でインドネシアに移住している。子どもがひとり以上いる。22人中、17人は国籍をインドネシアに変更(結婚時3人)、5人は日本国籍を保持している。ヒンドゥ教(Bali-Hindu)が13人、仏教が4人、イスラム教が2人、キ

リスト教が2人、その他が1人である。教育レベルは高卒から専門学校・短大・大学、社会経済的状况は中から上と推定される。程度には差があるが、日常会話以上のインドネシア語が可能である。

(2) 文化的アイデンティティ形成と「居場所」
 <事例1の語り - (文化的) アイデンティティ>

J (60代) は20代でインドネシア人男性と結婚し、直後にインドネシア国籍に変更。子どもがひとりいる。

- ・私はインドネシア人男性と結婚し、インドネシアに住んでいる日本人。
- ・私はインドネシア人の子どもをもつ日本人、でも国籍はインドネシア人。
- ・国籍はときかれば、インドネシア人、でも何人ときかれば『日本人』と答える。結婚して子どもが生まれてからはインドネシア人になろうとした。(中略) その後、インドネシア人になれないとわかった。だからやめた。まず、自分でなりたいと思っても周りがインドネシア人とは見てくれな

い。やはり外国人。言葉を話して、同じようになっても駄目。

(フィールドノートより、下線は筆者による)

<事例2の語り - 「居場所」>

S (50代) は20代でインドネシア男性と結婚し、しばらくたち、インドネシア国籍に変更。子どもが2人いる。

- ・土地を買うつもり。借りている家に住んでいると落ち着かない。自分の居場所がない。
- ・ここで骨を埋めるつもり。家族がここにいるから。Saki (娘) はバリ人と結婚しここにいるし、孫もいるから。

(フィールドノートより、下線は筆者による)

図2は、国際結婚日本人女性の(文化的)アイデンティティ形成と「居場所」について示している(鈴木, 2017aなど参照)。「日本人として社会化した自分(J)」は、インドネシアに移住し、新しい文化のなかで、「自然・人間・社会環境」に対するさまざまな「ずれ」を体験する。Jは、その「ずれ」に意識的・無意識的に「折り合い」をつけ、「二つの文

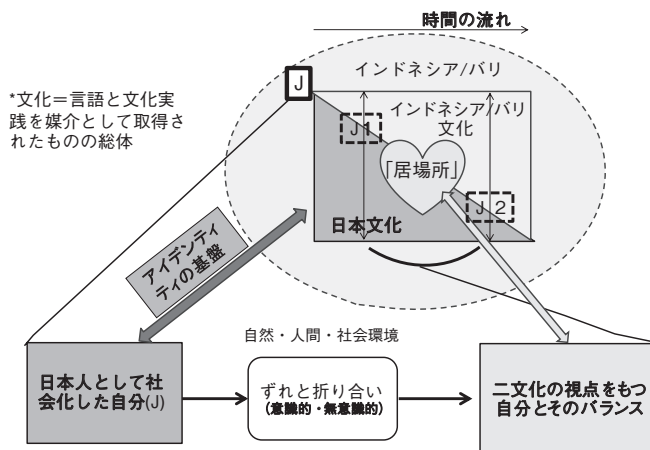


図2 国際結婚日本人女性の文化的アイデンティティ形成と「居場所」(鈴木, 2017aを改編)

化の視点」を保ちながら、両文化のバランスを取っていく。そのプロセスは生涯続き、時間の経過とともに、日本文化が減少（風化）し、インドネシア文化が増加するなかで、そのバランスが、維持されていく。J1は、日本文化>インドネシア・バリ文化、J2は、日本文化<インドネシア・バリ文化でバランスを保っている。その際に、両文化における「居場所」の有無が大きな役割を担うことが推察される。また、Jの（文化的）アイデンティティの基盤は「日本人」であり、「日本人であること」が変化することはない。

次に、国際結婚日本人女性の「居場所」に焦点をあて、共通事例を提示すると図3のようになる。50代の日本人女性であり、国籍はインドネシアだが、文化的アイデンティティは日本人である。「私は日本人、でもインドネシアの生活は快適。私の居場所はインドネシア。家も家族もここだから」と思っている。「実際の・空間的居場所」は、「インドネシア」では「家」、「日本」では「実家」、「心理的居場所」は、「インドネシア」では「家族」、「日本」では「日本の友人」と「日本人であること」

ること」である。

(3) 総合的考察：国際結婚日本人女性の文化的アイデンティティ形成と「居場所」

海外在住の国際結婚の日本人女性は、両方の国（文化）に、複数の「居場所」をもつが、インドネシアでの生活に心地よさを感じている。しかしながら、心理的に日本に帰属しており、日本人である。時間とともに、出身文化（日本）と居住地文化（インドネシア・バリ文化）の両方が混ざるが、心理的基盤としての「日本人」を一生を通じて保持していく。つまり、「日本人であること」は、海外在住の国際結婚日本人女性のアイデンティティの基盤、すなわち、「心理的居場所」である。また、「居場所」の存在は、二つの文化的視点のバランスをとるために必要不可欠であると考えられる。

3. 日本・インドネシア国際児青年（第二世代）の文化的アイデンティティ形成と「居場所」

(1) 調査参加者の主な特徴

表1は、調査参加者である日本-インドネ

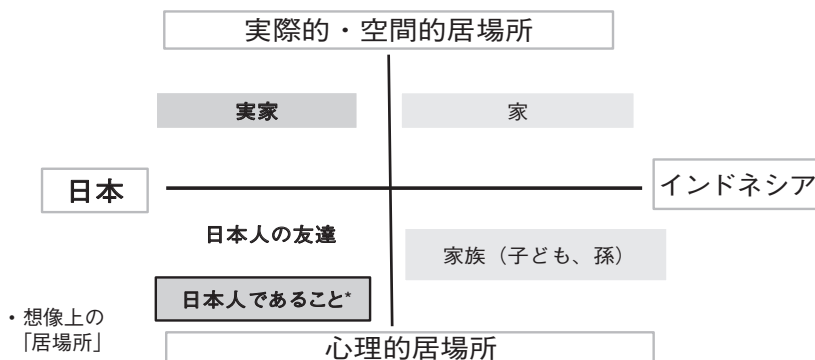


図3 国際結婚日本人女性の「居場所」

シア国際児青年（第二世代）の主な特徴を示している。

日本－インドネシア国際児青年は、インドネシア・バリ、あるいは日本で生まれ（その後、インドネシアに移動）ている。幼稚園から、現地校と日本語補習授業校（JPS）に通学（在籍期間は多様）している⁶⁾。一時的な日本訪問体験がある。また、程度には差があっても、日本語とインドネシア語の両言語を習得している。

(2) 日本・インドネシア国際児青年の文化的アイデンティティと「居場所」

表2は、日本－インドネシア国際児青年の

言語、文化、文化的アイデンティティなどを示している。

文化的アイデンティティに着目すると、程度の差はあっても、全員がある程度、両文化に帰属している。すなわち、「バイカルチュラル・アイデンティティ」をもっている。CK, EA, FM, IRの4人は、「均衡バイカルチュラル・アイデンティティ」、BS, DB, GR, HS, JMの5人は、「インドネシア優位バイカルチュラル・アイデンティティ」、そして、ARだけが、「日本優位バイカルチュラルアイデンティティ」である。ここでは、「均衡バイカルチュラル・アイデンティティ」をもつ4人のなかで、会話言語としてのインドネ

表1 日本・インドネシア国際児青年の特徴

事例	女/男	年齢	仕事	出生地	JPS	日本訪問回数	日本語能力の自己評価
AR	女	30代	主婦	日本	P1~J3	2回*	4
BS	女	30代	主婦	日本	K~P5	2回*	3
CK	女	20代	あり	日本	K~P4	2回*	3.5
DB	男	20代	あり	バリ	K~P6	数回	3
EA	女	20代	主婦	バリ	K~P6	多数回*	4
FM	男	20代	あり	日本	K~P3	数回*	4
GR	男	30代	あり	バリ	K~P3	1回	2.5
HS	女	20代	あり	バリ	K~P6	多数回	3.5
IR	男	20代	あり	バリ	K~P4	数回*	5
JM	男	30代	あり	日本	K~H3	数回*	5

JPS = 日本語補習授業校：K = 幼稚園、P = 小学校、H = 高校、* 1年間以上の日本滞在経験、1 = 最低得点、5 = 最高得点

表2 日本・インドネシア国際児青年の言語、文化、文化的アイデンティティ

事例	会話言語 (J対I)	文化	文化的アイデンティティ	日本人母親との言語	家庭内言語	日本での生活経験 (青年期以降)
AR	9 > 7	J = I	J > I ?	J	J < I	
BS	6 < 10	J < I	J < I	J < I	J < I	あり
CK	7 < 10	J = I	J = I ?	J > I	J > I	あり
DB	6 < 10	J < I	J < I	J > I	J < I	
EA	8 = 8	J > I	J = I	J > I	J < I	あり
FM	8 < 10	J = I	J = I	J > I	J > I	
GR	5 < 10	J < I	J < I	J < I	J < I	
HS	6 < 10	J = I	J < I	J > I	J < I	
→ IR	10 = 10	J = I	J = I	J > I	J < I	あり
JM	10 = 10	J < I	J < I	J	J	

J = 日本語/日本文化、I = インドネシア語/インドネシア文化、? = 推定、> (<) より > (<) の方が明確。
会話言語・J 1~10による自己評価で、10が最高得点。

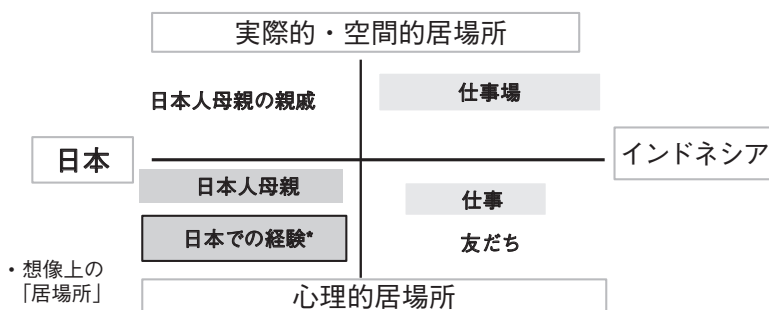
シア語も日本語も10（最高得点）であり、両文化の文化習得も10（最高得点）であるIRをとりあげ、「居場所」との関係について考察する（図4）。

＜事例IR－均衡バイカルチュラル・アイデンティティ＞

IR（20代）は、インドネシアで生まれ育つが、10代の終わりごろから5年間、勉強（専門学校）と仕事のために、日本に滞在した経験がある。両言語での会話が良好（最高得点の10）で、両文化を理解している（自己評価では最高得点の10）。「国籍はインドネシア、だから基盤はインドネシア（より多くの可能性があるから）」「日本では大変だったが、一生懸命働き、仕事をうまくこなすことができた。その経験は世界中で通用する」と語っている。

（3）全体的考察：日本・インドネシア国際児青年の文化的アイデンティティ形成と「居場所」

日本・インドネシア国際児青年は、「日本－インドネシア国際児青年としてのアイデンティティ」（バイカルチュラル・アイデンティティ）、すなわち、二つの文化が混合したアイデンティティを形成しており、それがアイデンティティの基盤になっている。特に、「均衡バイカルチュラル・アイデンティティ」の日本－インドネシア国際児青年（IR）は、図4に示されているように、「实际的・空間的居場所」と「心理的居場所」の両方の「居場所」が「日本」と「インドネシア」に複数ある。なかでも、「日本での経験」（「日本」の「心理的居場所」）は、イメージ（想像）上の「居場所」だが、「日本人の母親」と同様に、IRの文化的アイデンティティの中で重要な位置をしめている。また、「インドネシア」の「心理的居場所」は、「仕事」と「友だち」であり、「日本」の「心理的居場所」との均衡がとられている。「实际的・空間的居場所」も「日本」（日本人母親の親族）と「インドネシア」（仕事場）に存在する。「居場所」は文化的アイデンティティ形成に影響を及ぼし、文化的アイデンティティと「居場所」の間には相互関係性がみられる。したがって、複数文化背景をもつ青年が（文化的）アイデンティティを形成するためには、両方の文化における「居場所づくり」（「实际的・空間的居場所」と「心理的居場所」）を支援すること



⇒インドネシアと日本における複数の「居場所」

図4 日本－インドネシア国際児青年の「居場所」

が重要であると考えられる。

<結論と今後の展望>

本稿では、インドネシア在住の日系国際結婚家族、すなわちインドネシア人と結婚した日本人女性22人とその子ども（日本-インドネシア国際児青年）10人を対象に、長期にわたる縦断的フィールドワーク（「文化人類学的-臨床心理学的アプローチCCA/CACPA」）によって、複数文化背景をもつひとの「居場所」と（文化的）アイデンティティとの関係について検討した。その結果、次のことが明らかになった。1）インドネシア人男性と結婚し、インドネシアに移住した日本人女性のアイデンティティは「日本人」であり、心理的・精神的基盤、あるいは、「心理的居場所」として「日本人であること」を維持している（生涯維持していくことが推察される）；2）日本-インドネシア国際児青年（第二世代）は「バイカルチュラル/多文化アイデンティティ」を形成するが、アイデンティティの基

盤はブレンドあるいは混合された複数文化であり、両文化に複数の「心理的居場所」および「実際の・空間的居場所」を保有している；3）「自分自身」（ありのままの自分）と「居場所」は密接に関係し、時間の経過とともに変化しながら、海外在住家族（日本人女性とその子ども）のアイデンティティ形成に関与していくことが図5のように仮説的に示される。

今後の研究の課題としては、1）限られた調査参加者数のため、本調査結果についてはさらに検討する必要があること、2）同じ調査参加者を継続的に追跡することによって、本調査結果を踏まえた上で、生涯発達の観点からさらに詳細な分析を加え、（文化的）アイデンティティと「居場所」の関係を明確にしていくことは、「居場所づくり」という視点からも意味のあることであろうこと；3）グローバル化のなかで、増加しつつある複数文化をもつ人々の精神的健康や主観的幸福感（SWB）（図5）を促進するために、心理的・

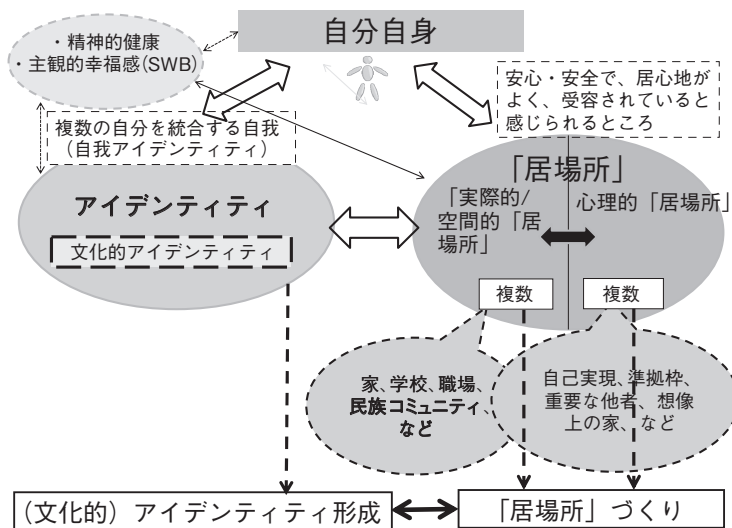


図5 自分自身、「居場所」、アイデンティティ（鈴木, 2016を部分的に改編）

教育的支援（例：「居場所づくり」）について検討し、具体的に提示することなどがあげられる。

<注>

- 1) 「居場所 (Ibasho)」に相当する概念として、英語の「ホーム」(home: 家/故郷) やドイツ語の「ハイマート」(Heimat: 故郷/ふるさと) があるが、類似している部分はあっても、日本語における「居場所」とは完全には一致しない。
- 2) 「東京シューレ」は、1985年に不登校の子どもをもつ親たちがつくった学校である。不登校の子どもは、学校に行かなくても、空間的・物理的意味では、家という「居場所」があるが、学校のある時間帯に居るべきではない家においても心理的な意味では「居場所」にはならない。したがって、フリースペースである「東京シューレ」は心理的な意味での「居場所」(「心の居場所」) としても考えられた(石本, 2009)。
- 3) 日独国際児青年(女性)のバイカルチュラルな文化的アイデンティティには、2つの文化のバランスによって、「均衡バイカルチュラル・アイデンティティ」(日本文化≒ドイツ文化)、「ドイツ(居住地)優位バイカルチュラル・アイデンティティ」(日本文化<ドイツ文化)、「日本優位バイカルチュラル・アイデンティティ」(日本文化>ドイツ文化)が存在する。
- 4) 厚生労働省の人口動態統計によると、2016年における日本国内の国際結婚(一方が日本人、他方が外国人)は21,180人で、婚姻総数の3.4%、日系国際児(両親の一方が日本人、他方が外国人)は19,118人で、出生総数の約2%だった。なお、海外で出生した日系国際児が9,732人いることから、国内外における出生総数に占める日系国際児の割合は3%弱になる(国内外の日本人の国際結婚件数は、国内外の総婚姻総数の5%弱を占める)。
- 5) 「居場所」については、心理尺度(例: 杉本・庄司, 2006)もあるが、本稿では、「居場所」の意味を説明した後、調査参加者に「居場所」とそ

の理由を答えてもらった。(文化的)アイデンティティについても、各調査参加者が自身のアイデンティティについて語っている部分を抽出し総合的に判断した。CCA/CACPAの詳細については、鈴木(2008)を参照されたい。

- 6) 日本語補習授業校は、義務教育年齢の海外在住日本人児童・生徒の教育を目的とする海外学校(小・中学校)のひとつであるが、全日制ではなく、週1-2回、国語や算数のみの授業をおこなう補助的な学校である。なお、パリ日本補習語授業校には、幼稚園および高校生以上対象のクラスもある。

謝辞

本研究の一部はJSPS科研20530782, 23402063の助成を受けました。深く感謝いたします。

<引用文献>

- Erikson, E. H. (1950). *Childhood and Society*. New York: Norton. (仁科弥生(訳)(1977/80). 幼児と社会 1・2 みすず書房)
- Erikson, E.H. (1959). *Identity and the life cycle*. New York: International Universities Press. (小此木啓吾(訳編)(1973). 自我同一性 誠信書房 / 西平直・中島由江(訳)(2011). アイデンティティとライフサイクル 誠信書房)
- 石本雄真(2009). 居場所概念の普及およびその研究と課題 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 3 (1), 93-100.
- 厚生労働省(2017). 人口動態統計
- 外務省(2018). 海外在留邦人数統計
- 三浦綾希子(2014). 二つの「ホーム」の間で: ニューカマー 1.5世の帰属意識の変容と将来展望—日系ブラジル人の事例から 異文化間教育, 40, 18-33.
- 村田晶子・古川知樹(2014). 留学生の第三の居場所: SNSを通じた人とのつながりと相互支援: 進学の境界線越えに焦点を当てて 異文化間教育, 40, 53-69.

- マーフィ重松, スティーブン (2014). ミックスルー
ツの人々にとってのホームを探す物語: 「私たち」
のストーリーを語るということ 異文化間
教育, 40, 85-96.
- 額賀美紗子 (2014). 越境する若者と複数の「居場
所」: 異文化間教育学と居場所研究の交錯 異
文化間教育, 40, 1-17.
- Suzuki, K. (2002). A study using “Cultural
Anthropological – Clinical Psychological
approach”: Cultural identity formation in
Japanese – Indonesian children. *Bulletin of
Saitama Gauken University (Faculty of
Humanities)*, 2, 1-9.
- 杉本希映・庄司一子 (2008). 「居場所」の心理学
的機能の構造とその発達の変化 教育心理学研
究, 54, 289-299.
- 鈴木一代 (2006). 文化移動と文化的アイデンティ
ティ: 異文化間結婚の場合 埼玉学園大学紀要
人間学部篇, 6, 83-96.
- 鈴木一代 (2008). 海外フィールドワークによる日
系国際児の文化的アイデンティティ形成 プレ
ーン出版
- 鈴木一代 (2009). 成人期の文化間移動と生涯発達
への影響についての研究: 異文化間結婚の場合
埼玉学園大学紀要 (人間学部篇), 9, 69-80.
- 鈴木一代代表 (2011) 「日系国際児のアイデンティ
ティ形成とその支援のあり方に関する実証的研
究」『平成20年度 – 平成22年度科学研究費補助
金 (基盤研究 (C)) 研究成果報告書 (課題番
号20530782)』
- 鈴木一代 (2012). 成人期の文化間移動と文化的
アイデンティティ: 異文化間結婚の場合, ナカニ
シヤ出版
- 鈴木一代 (2013). グローバル化社会と多面的アイ
デンティティ: 国際結婚者と国際児の場合 埼
玉学園大学紀要人間学部篇, 13, 106
- 鈴木一代 (2016). 多文化環境と精神的健康: 文化
的アイデンティティと「居場所」を中心に 埼
玉学園大学紀要人間学部篇, 16, 43-52.
- 鈴木一代 (2017a). 移民・難民とこころのグローバ
ル化: 移住国際結婚家族の場合 こころと文化,
第16巻第1号, 36-41.
- 鈴木一代 (2017b). 国際児の「居場所」と文化的
アイデンティティ 日本心理学会第81回大会公
募シンポジウム「外国につながる人びとの『居
場所』をめぐる」(久留米)
- Suzuki, K. (2018). “Ibashi” and cultural identity
formation of Japanese immigrant families in
Indonesia. In the symposium “Identity and
“Ibashi” in multicultural environments :
Looking for one’s own self” of the 24nd of
Congress of International Association of Cross-
Cultural Psychology on 2. July. Guelph
(Canada).
- 鈴木一代・藤原喜悦 (1992). 国際家族の異文化適
応・文化的アイデンティティに関する研究方法
についての一考察 東和大学紀要, 18, 99-112.
- 徳永智子 (2014). 国境を越える想像上の「ホーム」:
アジア系アメリカ人の女性生徒 によるメディア
ア/ポピュラーカルチャーの消費に着目して
異文化間教育, 40, 70-84.
- Tokunaga, T. (2018). Learning to belong in the world:
An ethnography of Asian American girls.
Springer.
- 山ノ内裕子 (2014). トランスナショナルな「居場
所」における文化とアイデンティティ: 日系ブ
ラジル人の事例から 異文化間教育, 40, 34-52.

[付記]

本稿は、異文化間教育学会第39回大会 (2018年6
月9日、新潟大学五十嵐キャンパス) のケース・パ
ネル発表「ありのままの自分を求めて – グローバ
ル化社会におけるアイデンティティと『居場所』」、お
よび the 24nd of Congress of International
Association of Cross-Cultural Psychology (Guelph, 2.
July, 2018) のシンポジウム “Identity and “Ibashi”
in multicultural environments : Looking for one’s
own self” で発表した内容に加筆・修正を加えたも
のである。